新しい悦びの時代へ向けて

NPO法人
くだかけ会代表
和田重良

1948年小田原市生まれ
くだかけ生活舎での共同生活（人生科や農作業）をとおして、青少年や家庭の生活にさまざまなメッセージを送っている。

人生においても、教育を考えるためにも、一人一人にとって「今をどう生きるか」が大切なことであることは言うまでもありません。
過去を悔んで、また未来を憂いてばかりでは新しい時代を生み出せません。
今日からイキイキと生きましょう。何歳からでも…。

第十回 やる気の仕組み

人間のこころの様子

人間のやる気というのはどうもそう単純にはできていないようなのです。それどころか「こころ」の様子というのは知と情と意という分野の総合で考えなければならないのでしょう。でも、それでは何のことやらわからなくなるので、単純に行動の動機について考えてみましょう。

例えば一般的に「面白そうなことはやってみたい」「心地よさそうなことはしてみたい」の反面「いやなことは避けたい」「辛そうなことはしたくない」というものや、少し複雑に「大変だけどなんとなく自分のためになりそうだからやってみる」という反面「人の目が気になるからやらない」とか「努力がムダになりそうだからしない」などというこころの動きもあります。

もちろん「意欲」は「欲望」にもとづいているのですから、その説明は複雑で多岐にわたります。

ジャングルジム（動機と意志）

事務所のある「川の家」に来ていた子どもたちと近所の公民館にお散歩に行きました。

そこには小さな五段のジャングルジムがありました。三歳もいれば五歳もいれば、小学生達もいっしょに行ったので、早速、皆思い思いにジャングルジムにとっついて行きました。隣りにはブランコもすべり台もあったのですが、この日はきっと皆ジャングルジムの気分だったのでしょうね。

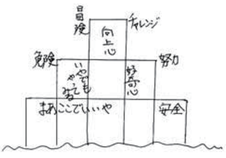
まあぼくは責任上、いっしょに登りたい気持ちをおさえて皆の様子を見ていました。年令に関係なく慎重な子もいればガンガン登っていく積極的な子もいるのです。昼間ぼくの所に来る子たちはほとんど学校に行けなかったり、行かなかったりする子ですからそういう子たちを「不登校児」と言って「弱々しい子」とひとくくりに言うのは間違いだとすぐわかります。いろいろな子がいるのですし、その日によって気持ちも違うのです。

そこで、ジャングルジムをモデルにしてちょっと考えてみました。実際は五段ありましたが、三段にしてみました。

「上に行ってみよう」又は「横へ移動してみよう」という単純な仕組みですが、「やる気の仕組み」と似ていたのです。こうしてみると「やる気」は「動機と意志」だということがよくわかるのです。

「もう一つ上に行ってみよう」という気持ちは好奇心や向上心や、やる気をそそる何かがあるのです。そこで、親が「危ないから行っちゃダメ」と言ったとすると「まあここでいいや」と思い、安全だと思うことだけをして何となく満足をするようにさせられるのです。

いつの間にか折角「もう一つ上に行こう」という気が無くなるどころか、何でも親が手助けして助言したり、代行してくれるもんだと思い込むようです。



「自然体」を害するもの

人間にとって「やってみよう」と思う意欲は自然に湧いて出てくるように仕組まれているようなのです。ところが「教育」は外からの動機づけをして「意欲」を持たせようとするのでカラ回りしてしまう子ができてしまいます。

ぼくは長年こういう子たちといっしょに生活をしながら、どの子もだんだんと内なる動機に気づいて意欲的になっていく道をやって来たわけです。それが「よかったね」や「よく来たね」の愛言葉であり「小さな『気づき』をホメる」という内容なのです。

たいてい、人は失敗や成功の体験がモノを言うことになっているのです。失敗や成功を自らじっと味わってみることで成長しているのです。親がまるで自分の責任のように、そういう失敗や成功の体験を尻ぬぐいしてしまい、「セルフコントロール」を会得するチャンスを失ってしまいます。

おとなになり損なうのですね。

どれが自然か、どこが健全か、ということを量る尺度というものをこの文明の便利さの中で見失ってしまっているのです。

親の過干渉、過保護が自然体を害しているとずっと昔から言われているのですが、そこにドップリ浸っている人は言われても分らないのです。

そこで、一つの量りとして「平和」という尺度を当ててみようと、ぼくは提唱したいのです。そうすると、すべてに当てはまるようなのです。「平和」といっても「こころの平和」です。